

## I 実践

## 1 研究主題

「みんななかよく、たのしく」学校生活を送ることのできる児童の育成を目指して

## 2 主題設定の理由

本校の教育目標は、「一人一人の能力をのばし、心身ともにたくましい人間性と豊かな児童の育成に努める」であり、「かしこく・なかよく・たくましく」を三つの柱とし教育活動を展開している。その中でも人権教育においては、一人一人の人権を尊重することを目的としているため、「なかよく」が最重要だと考えた。したがって、「みんななかよく、たのしく」学校生活を送るためにはというテーマのもと実践を進めていくことにした。

本校は全校児童921名という大規模校である。集団での教育活動を重視するあまり、個々のニーズに合った教育がおろそかにならないよう注意する必要がある。そのためには、児童一人一人の人権を尊重し、児童全員が誰に対しても思いやりの心を持ち、互いの良さを認め合い、仲良く助け合って行動できるよう育てていく必要がある。その手立てとした実践内容を以下に述べる。

## 3 実践内容

## (1) 人権メッセージの募集

各学級において、人権メッセージの募集を呼びかけた。道徳の時間など各学級において、一人一つは考えるよう促した。児童によっては、いじめ撲滅に関する内容を書いたり、友達と仲良く学校生活を送ることについて書いていたり様々であった。人権について考える、いいきっかけとなったと考える。

## (2) 人権教育強調月間の実施

## ア KKS（くつを・きれいに・そろえよう）キャンペーン

昨年度に引き続き、今年度も KKS キャンペーンを実施した。これは全校児童で「くつを・きれいに・そろえよう」というものである。実施しようと考えた目的を以下に述べる。本校の人権教育の目標に、「互いの良さを認め合い仲良く助け合って人のために尽くすことができる子を育てる。」というものがある。互いの良さを認め合うには、まず互いの良さを見つけなければならない。それを見つけるためには、目に見えない小さなことにも気付くことのできる児童の育成が不可欠である。そこで、まず、目に見えるところからということで、下駄箱の靴の整頓に着目した。下駄箱の靴をきれいにそろえるということが直接、互いのよさを発見することにつながるわけではないが、小さなことにも気付いて行動に移すということは重要だと考え、実施するにいたった。

キャンペーンの結果を放送で発表することで、児童への意欲付けを行うことができた。

なお、キャンペーンが終わった後も、各学級において継続している。

## イ 人権集会（いじめゼロ集会）の実施

これは、運営委員（集会の準備や企画を、中心となって行う委員会）の児童が主体となって行ったものである。まず、児童がいじめのないよりよい学校にするためには、どのような活動をしたらよいだろうかというテーマのもとで、いじめを題材とした劇を行おうという意見が出た。そこで、人権教育担当の教諭から、「劇だとなかなか伝えたいことを伝えるのが難しいかもしれないので、劇をビデオとして編集し、それを放映してみてもは」という提案があった。それにより、2つの人権劇を行うこととなった。

## (ア) 人権劇その1「学級からいじめをなくそう」

この劇は、いじめを周囲で見ている児童が、町で出会った人との出会いをきっかけに、学級で起こっているいじめをなくそうと様々な取り組みをする物語である。この物語の特徴としては、いじめをしていた人に罰を与えることではなく、いじめをしていた人も仲間にして、みんなで仲良く生活しようということ呼びかけている点である。



(イ) 人権劇その2「ぼかぼか名人さん」

この劇は、学級内のある友人どうしのすれ違いから起こったトラブルを、時間を戻すことのできるぼかぼか名人さんとの出会いにより、すれ違わないような言葉のやりとりを喚起するものとなっている。



出展 佐賀県人権・同和教育研究協議会

人権劇シナリオ「みんなでいじめをのりこえよう」「教えて！ぼかぼか名人さん」

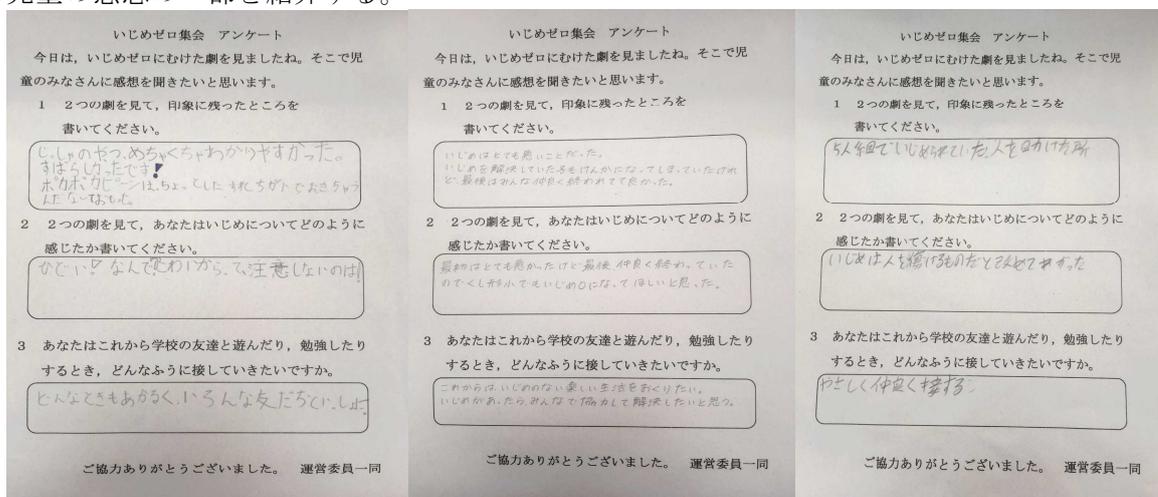
(3) 職員研修

人権教育についての意識の高揚を目的とした職員研修を行った。内容は、「特別支援教育の配慮を要する児童がもし学級にいたら」というテーマのもと、「聲の形」という映画を観て考えるものと、読唇術を用いたコミュニケーションの取り方という二本立てで行った。「聲の形」は文部科学省のホームページにおいて紹介されている教材であり、耳の聞こえない児童への接し方や配慮について、職員で話し合いを行った。また、読唇術については、特別支援教育を専門とする教諭が講師となって、自分の名前を手話で話す活動などが行われた。

出展 映画「聲の形」

4 成果

今年度は、「いじめゼロ集会」を行ったことで、いじめをしてはならないことを児童全員が再認識でき、友達との関わり方についても考えさせることができた。以下に、いじめゼロ集会における児童の感想の一部を紹介する。



※児童アンケートの一部

このように、いじめをしないことはもちろん、いじている人への接し方についても記述している児童がいたので、「みんななかよく、たのしく」という意識を高めることができたのではないかと考える。

II 今後の課題

人権教育は上にあげたような集会やキャンペーンだけでなく、教育活動全体で行う必要があり、校内の全児童が「みんななかよく、たのしく」学校生活を送れるようにすることが課題であると考えられる。児童の中には、うまく友人と会話できなかったり、友達づくりを苦手としていたりする児童が少なくない。そのため、年間を通じた人権教育を位置づけた教育活動の充実が不可欠である。今後は、人権コーナーを設置したり、人権をテーマとした道徳の教材を教員間で共有したりして人権教育の更なる充実を図っていきたい。なお、作成した映像について有効活用するためにも、市の人権教育部の中で共有していきたい。

